

予防鍼灸研究会（SGPAM）

第25回定例会抄録

テーマ：

パーキンソン病治療の新しい側面

2026年3月22日

目次

パーキンソン病患者に対する呼気鍛錬とその嚥下改善	岩崎真樹2
パーキンソン病診療の現在地と未来—基本治療・課題・多職種連携—	坪井義夫3

パーキンソン病患者に対する呼吸鍛錬とその嚥下改善

ガンコジン鍼灸院 岩崎真樹

【背景・目的】パーキンソン病（以下、PD）における呼吸・嚥下・発声・発音・構音の障害は、生活の質（QOL）を著しく低下させる。本研究では、呼吸（息を吐くこと）を重視した腹式呼吸トレーニングである「呼吸鍛錬」を提唱し、PD患者の嚥下機能および随伴症状の予防・改善に寄与するかを検討した。**【対象】**「パーキンソン病友の会」練馬支部会員および「PD患者のための呼吸鍛錬リモートクラス」の参加者、計20名。**【方法】**YouTube動画（「早口言葉で脳トレ」「嚥下改善のセルフメニュー～発声を中心に～」）を制作・配信し、補助資料としてポスターを配布。これらを用いた継続的な「呼吸鍛錬」を指導し、参加者20名のうちの5名に対し、聖隷式嚥下質問紙、アパシーScaleを用いてアンケート調査を実施した。**【結果】**嚥下障害は5例中4例で改善、アパシーも5例中4例で改善が認められた。症例数は限定的ではあるが、本手法がPDの諸症状に対し有効である可能性が示唆された。**【考察】**PDの嚥下障害改善には、舌や口周りのトレーニングのみならず、「姿勢の改善」が不可欠である。呼吸鍛錬では、勢いをつけた速い動きとリズムカルな発声を組み合わせることで、発声が改善すれば姿勢も改善する。姿勢が改善すれば嚥下も改善するという2ステップが嚥下障害改善に寄与したと考えられる。**【結論】**PD患者に対し、早期から呼吸鍛錬を実践することは嚥下障害の有用な予防策となり得る。また、鏡を用いた視覚的なキューと、自己の姿勢の歪みを認識・修正し続けることが、嚥下機能改善の鍵である。今後は、鍼灸治療と呼吸鍛錬の併用による相乗効果についてもさらなる検討が必要である。

略歴

- 2015年 日本鍼灸理療専門学校卒業、金井正博氏に師事
- 2017年 パーキンソン病友の会 練馬支部「ゆるりサロン」講師
- 2019年 ガンコジン鍼灸院 開業

パーキンソン病診療の現在地と未来

— 基本治療・課題・多職種連携 —

つつみクリニック福岡パーキンソン病専門外来センター/
順天堂大学PD長期観察共同研究講座 特任教授
坪井義夫

パーキンソン病（PD）は高齢化とともに患者数が増加しており、主に高齢者に多くみられる神経変性疾患である。PDは運動緩慢、振戦、筋強剛などの運動症状に加え、気分障害、自律神経障害、睡眠障害、便秘、疼痛、疲労など多彩な非運動症状を伴う全身性疾患である。現在の治療の基本はレボドパを中心とした薬物療法であり、MAO-B阻害薬、COMT阻害薬、ドパミンアゴニストなどの併用により、運動合併症や非運動症状への対応が行われている。しかし、現時点では病勢の進行を抑制する治療は確立されておらず、薬効の日内変動、姿勢異常、疼痛、自律神経症状など、薬物抵抗性の課題も少なくない。近年は持続ドパミン刺激を目的としたデバイス補助療法や脳深部刺激療法が導入され、さらに再生医療や遺伝子治療など新たな治療開発も進んでいる。一方で、生活機能の維持には運動療法、栄養療法、心理的支援を含む包括的介入が不可欠である。本講演ではPD治療の現在地と近未来を概観し、鍼灸治療が果たし得る役割にも触れながら、多職種連携の中でPD患者の生活を支える実践的視点を共有したい。

略歴

脳神経内科医。つつみクリニック福岡パーキンソン病専門外来センター長、順天堂大学PD長期観察共同研究講座特任教授。

パーキンソン病の運動症状・非運動症状および生活機能に着目した包括的診療を実践し、オンライン診療や訪問診療にも取り組む。研究ではパーキンソン病および関連疾患、さらに希少疾患であるPerry病の臨床・研究に従事。国内外の共同研究や学会活動を通じ、診療の質向上、多職種連携の推進、患者支援にも取り組んでいる。